

『伊曾保物語』と書籍目録

濱田 幸子

一 はじめに

二 書籍目録に見る『伊曾保物語』の位置づけ

三 『そろり物語』『似我蜂物語』と『伊曾保物語』

四 おわりに

『伊曾保物語』は、キリスト教布教・伝道を目的に
来日した外国人宣教師によって伝えられたイソップ寓
話集が、和訳された書物で、慶長・元和（一五九六
～一六二三）年間版から版を重ね人々に読み継がれて
きた。それが引用されている書物を見る限りでは『伊
曾保物語』は教訓書として受け容れられたといえる。
しかし、当時出版された書籍目録で並べ置かれている
書物を見ると、『伊曾保物語』は教訓書としてのみ受
け容れられていたのではないことが見えてくる。江戸
時代の書籍目録を利用して、『伊曾保物語』がどのよ
うに受け容れられていたのかを明らかにしようとする。

一 はじめに

『伊曾保物語』は、キリスト教布教・伝道を目的に来日した外国人宣教師によって伝えられたイソップ寓話集が和訳された書物である。言い換えれば西欧から日本にもたらされた最初の翻訳文学である。この『伊曾保物語』は、慶長・元和（一五九六―一六二三）年間版から寛永十六（一六三九）年刊本まで九種の古活字本が出、その後万治二（一六五九）年刊の挿絵入り整版本も出て一般に広く普及している。キリシタン禁制であり、また鎖国の時代において、キリシタンによってもたらされた西欧の翻訳文学である『伊曾保物語』がこのように版を重ね人々に読み継がれてきたことは驚くべきことである。

『伊曾保物語』は、刊行当初から、笑話を集めた『戯言養気集』（元和 へ一六一五―一六二三）年間頃）、狂言の芸談に注釈が加えられた『わらんべ草』（万治三 へ一六六〇）年）等に引用されている。樗牛道人の『鄙都言草』後編巻下（享和二年 へ一八〇二）年には「伊曾甫といへる草紙」と紹介され、一話載せられている。司馬江漢の随筆集『春波楼筆記』（文化八 へ一八一）年には『伊曾保物語』と云ふ書は西洋の訳書なり」と紹介されて教話載せられている。また、司馬江漢の教訓書である『訓蒙画解集』

（文化十一 へ一八一四）年）『無言道人筆記』（文化十一 へ一八一四）年）にも数話紹介されている。柴田享（陽方）の『続続鳩翁道話』（天保九 へ一八三八）年）にも一話紹介されている。さらに天保十五 へ一八四四）年刊の教訓書『絵入教訓近道』には十六話が載せられている。このように、引用している書物は、笑話集、芸道書、文人の随筆、教訓書と多岐にわたっているが、人を導くための書物での引用が多い。その事実からは、『伊曾保物語』の中の、『イソップ寓話』が本来持つ処世のための知恵や教訓が、江戸時代の、諸芸の師、学者、教育者に童蒙を教導する材として受け容れられたと言えるだろう。

しかし、『伊曾保物語』は教訓書としてのみ受け容れられたのではないようである。当時出版された書物がどう読まれていたのかを知る手がかりとして、書籍目録に注目し、『伊曾保物語』がどのように受け容れられていたのか、以下の章で考えていく。

二 書籍目録に見る『伊曾保物語』の位置づけ

書籍目録で書物がどう分類されているかをみることは、その書籍目録の製作者がその書物をどう認識しどう読んでいたかをみることに過ぎない。しかし、当時の読者は書籍目録を見て書物を求め、読んだわけで、一度目録に載せて

も人々が読まないような書物は目録から省かれていったし、^①版元も、人々が求めている書物を出版し、書籍目録にも掲載したであろうから、書籍目録の記載は制作者一人だけの見方ではなく、読者の意向を反映したものとも言えるだろう。書籍目録の項目による『伊曾保物語』の位置づけについては、武藤禎夫氏によって既に指摘されている。^②しかし、それは、『伊曾保物語』が掲載されている全ての書籍目録について言及されたものではなく、さらに詳しい調査研究の必要があると思われる。

さて、『江戸時代書林出版書籍目録集成』^③を見ると『伊曾保物語』が掲載されている書籍目録は十二種ある。それらの書籍目録と刊記（出版年と版元）、『伊曾保物語』が掲載されている欄の目録における分類項目、そして『伊曾保物語』と列記されている書物名を一覧表にしたものが表「書籍目録に見る『伊曾保物語』の位置づけ」である。

表をみると、目録の分類の仕方が二種に大別できることが分かる。すなわち、A、部類わけ目録と、B、イロハわけ目録である。Aの部類わけ目録は、全ての書物を部類によって分けた目録で、1寛文無刊記の書籍目録、2寛文十年の書籍目録、3寛文十一年の書籍目録、4延宝三年の書籍目録、7貞享二年の広益書籍目録、8元禄五年の書籍目録、10元禄十二年の新版増補書籍目録の七種である。刊記

のあるものについて言えば、2は京都と江戸の両方の出版であるが、他は全て京都の出版である。一方Bのイロハわけ目録は、書名をまずイロハ順にし、イで始まる書物群、ロで始まる書物群等それぞれの中で仏書、儒書、医書、仮名等に分類するというものである。この分類をしているのは、5延宝三年の新增書籍目録、6天和元年の書籍目録大全、9元禄九年の書籍目録大全、11宝永六年の書籍目録大全、12正徳五年の書籍目録大全の五種である。5、6は江戸で、9、11、12は京都で出版されている。B種の書籍目録では『伊曾保物語』はイの仮名に分類されるが、列記される書物もイで始まる書物に限定されるため、仮名草子全体における『伊曾保物語』の位置付けをみることは難しい。そこで、次に、Aの部類わけ目録について詳しくみていくことにする。

1の寛文無刊記の書籍目録では、『伊曾保物語』は「和書并仮名類」という項目に分類されている。ここで列記されている書物は『可笑記』『可笑記評判』『悔草』『たが身のうへ』『身のかがみ』『堪忍記』『智恵鑑』といずれも教訓書である。この書籍目録においては『伊曾保物語』も教訓書と認識されていたことがわかる。

しかし、それ以降の刊記を有する書籍目録では『伊曾保物語』の分類に変化が生じている。2の寛文十年の書籍目

書籍目録に見る『伊曾保物語』の位置づけ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	書籍目録	書籍目録	書籍目録	書籍目録	新増書籍目録	書籍目録大全	広益書籍目録	書籍目録	書籍目録大全	新増書籍目録	書籍目録大全	書籍目録大全
出版年	寛文無刊記	寛文10 (1670)	寛文11 (1671)	延宝3 (1675)	延宝3 (1675)	天和元 (1681)	貞享2 (1685)	元禄5 (1692)	元禄9 (1696)	元禄12 (1699)	宝永6 (1709)	正徳5 (1715)
刊 元 版		江戸本町三丁目 西村又右衛門 京寺廻廊御前 西村又右衛門	(京都) 寺町通二条上 ル町 山田市良兵衛	(京都) 落下書齋 毛利文八	江城下之書林	(江戸) 日本橋南一丁 目左内町 山田喜兵衛	(京都) 八尾市兵衛 吉野屋次良兵衛 坂上勝兵衛 西村市良兵衛	(京都) 洛陽書林 永田謙兵衛 西村市良兵衛 坂上勝兵衛 八尾市兵衛	(京都) 洛陽書林 永田謙兵衛 西村市良兵衛 八尾市兵衛	(京都) 丸屋源兵衛	(京都) 丸屋源兵衛	(京都) 丸屋源兵衛
	分類	和書・仮名類 咄の本	狂歌并咄本	はなしの本	イ・仮名	イ・仮名	物語類	物語類	イ・仮名	舞并草紙	い・仮名	い・仮名
				はなしの本						小さかつき		
		はなしの本	はなしの本	しめた咄						かなめ石		
		百物語	百物語	蘭睡笑						むさしあふみ		
		しめた咄	しめた咄	ひとり笑			かなめ石			おとぎぼうこ		
		蘭睡笑	蘭睡笑	ひとり笑	十六夜日記	十六夜日記	おとぎぼうこ			大はりこ		
	可笑記	ひとり笑	ひとり笑	一休はなし	大百人一首	大百人一首	ゆらい物語		十六夜物語	続おとぎぼうこ	十六夜物語	十六夜物語
	同小本輸入	そろり物語	そろり物語	同関東はなし	一条神閑道記	一条神閑道記	そろり物語	由來物語	大百人一首	新おとぎぼうこ	大百人一首	大百人一首
	同評判	一休はなし	一休はなし	同諸国咄	和泉式部物語	和泉式部物語	むさしあふみ	そろり物語	和泉式部物語	そろり物語	和泉式部物語	和泉式部物語
	梅草	西行歌咄	西行歌咄	西行歌咄	異国物語	異国物語	似我蜂物語	似我蜂物語	異国物語	似我蜂物語	異国物語	異国物語
	伊曾保物語	いそほ物語	いそほ物語	いそほ物語	伊曾保物語	伊曾保物語	似我蜂物語	似我蜂物語	いそほ物語	似我蜂物語	いそほ物語	いそほ物語
	たが身のうへ	似我蜂物語	似我蜂物語	似我蜂物語	石山物語	石山物語	花の名残	宗祇諸国物語	石山物語	花の名残	石山物語	石山物語
	身のかかみ	むさしあふみ	むさしあふみ	むさしあふみ	巖屋草紙	巖屋草紙	当世尤双紙	巖屋物語	岩屋物語	竹斎榮治物語	岩屋物語	岩屋物語
	堪忍記	かなめ石	かなめ石	かなめ石	岩屋草紙	岩屋草紙	竹斎榮治物語	なよ竹物語	犬追物語	竹斎榮治物語	犬追物語	犬追物語
	智恵鑑	おとぎぼうこ	おとぎぼうこ	おとぎぼうこ	犬追物語	犬追物語	宗祇諸国物語	風無常物語	一遍上人縁起	宗祇諸国物語	一遍上人縁起	一遍上人縁起
	大和小学		判官はなし	同新版			続おとぎぼうこ	田畑龍題物語	為愚痴物語	世間胸算用	一休咄	為愚痴物語
	同小学						新おとぎぼうこ	名月物語	一休咄	同小本	一休咄	同小本
	見ぬ世の友								同小本	武道伝来記	同諸国ばなし	同諸国ばなし
	女四書								同諸国ばなし	武道一覽		同諸国ばなし
												同諸国ばなし

録には「仮名和書」という分類があり、そこには、1で「和書并仮名類」と分類されていた『可笑記』『可笑記評判』『悔草』『たが身のうへ』『身のかがみ』『堪忍記』『智恵鑑』が並んでいるのに、『伊曾保物語』だけが、この書籍目録で新たに設けられた「咄の本」の分類に移されているのである。また、3寛文十一年の書籍目録、4延宝三年の書籍目録でも、『伊曾保物語』は「咄の本」に分類されている。⁽⁶⁾『伊曾保物語』の前後に列記されている書物名は、2、3、4とも同じで、すぐ前は『西行歌咄』、遡って『一休はなし』『そろり物語』『ひとり笑』『醒睡笑』『しかた咄』『百物語』と並び、『伊曾保物語』の後は順に『似我蜂物語』『むさしあふみ』『かなめ石』『おとぎぼうこ』と続いている。

『伊曾保物語』のすぐ前に置かれた『西行歌咄』は西行を主人公とした歌物語、『一休はなし』は一休和尚を主人公とした物語であり、『そろり物語』は豊臣秀吉の御伽衆曾呂利新左衛門が語った話という体裁をとった物語である。これらは、イソポの伝記部が重視されて、『伊曾保物語』がイソポを主人公とした物語と認識されたためにこのように列記されたのであろうか。また、『醒睡笑』『しかた咄』『百物語』は笑話集であり、『ひとり笑』は有名古歌を本歌取りにした狂歌を収めたものである。これらの書物と列

記されていることから、『伊曾保物語』は笑話集とも見なされていたと思われる。『伊曾保物語』の寓話には人を笑わせる要素も多く、それは首肯されることである。

一方、『伊曾保物語』の後に列記された書物を見ると、『似我蜂物語』は随筆、説話、日用メモから小説といった雑多なものが混在した書物であり、『むさしあふみ』『かなめ石』は浅井了意のルポルタージュ的読み物、『おとぎぼうこ』は、これも浅井了意の怪異談である。「咄の本」という分類項目には、こういった雑多な内容の書物を収めていたのかもしれない。『伊曾保物語』は、少なくとも2の寛文十年の書籍目録以降は教訓書とは見なされなくなっているのである。

さて、7の貞享二年の広益書籍目録からは『伊曾保物語』は「物語類」に分類される。7にも「咄の本」という分類項目はあるが、そこから、2、3、4では「咄の本」に分類されていた『そろり物語』『伊曾保物語』『似我蜂物語』『むさしあふみ』『かなめ石』『おとぎぼうこ』がまとめて抜き出され、7で新たに独立して設けられた「物語類」の終わり部分に移されている。ただ『ひとり笑』だけは7で新たに設けられた「好色之類」に移し置かれている。ひとまとまりであった書物群から『ひとり笑』だけを「好色之類」に移しているところからは、目録作者の、書物の

内容にふさわしい分類を目指した分類意識を見て取ることができる。

この「物語類」は7の貞享二年の広益書籍目録になって初めて出てくる分類項目であるが、ここに置かれている書物の多くは、4で「舞并草紙」に分類されていた書物である。『伊曾保物語』に列記される書物は、すぐ前は『似我蜂物語』、遡って『むさしあふみ』『そろり物語』『ゆらい物語』『おとぎぼうこ』『かなめ石』である。『ゆらい物語』は未詳であるが、他の書物は先に見たとおりで並び順だけが変わっている。先に「咄の本」に分類されていたものから「物語類」に移した書物を『伊曾保物語』の前に置いただけのようにもみえる。また『伊曾保物語』の後に続く書物は『花の名残』『当世尤草子』『竹斎療治物語』『宗祇諸国物語』である。『当世尤草子』と『竹斎療治物語』の出版年は未詳だが、『花の名残』は天和四年刊、『宗祇諸国物語』は貞享二年刊であるから、4にはなかった新しい書物がそこに付け加えられたということだろう。

7とほぼ同じ並びであるのが、10の元禄十二年の新版増補書籍目録である。7との違いは、ルポルタージュ的読み物である『むさしあふみ』と『かなめ石』を一続きに並べている点と、あらたに元禄五年に出た浅井了意の怪奇小説『犬はりこ』が、同じく浅井了意の怪異談『おとぎぼう

こ』のすぐ後に置かれ、7では『伊曾保物語』の後にあった『続おとぎぼうこ』『新おとぎぼうこ』がその後に置かれている点である。このことから、同じジャンルの書物は列記しようという目録作者の分類意識が明らかにみられる。『似我蜂物語』以降の並びは7と同じである。

しかし、7では分類項目が「物語類」であったのに、10では「物語類」の分類項目は無くなり、「舞并草紙」に分類されている。『伊曾保物語』とその並びの書物群がそのまま「舞并草紙」の分類の終わり近くに置かれ、その後は西鶴の浮世草子『西鶴諸国咄』『世間胸算用』『永代蔵』『武道伝来記』が置かれているのである。この7から10にかけての分類項目の変化の理由は不明である。

ところで、7と10の間に出された8の元禄五年の書籍目録では、『伊曾保物語』の分類は7と同じ「物語類」である。しかし『伊曾保物語』に列記される書物が先の二つの目録とは大きく違っている。ルポルタージュ的読み物である『むさしあふみ』『かなめ石』、怪異談である『おとぎぼうこ』と『犬はりこ』が『伊曾保物語』とは随分離れたところに置かれている。『犬はりこ』に列記される書物を示すと、次の通りである。すなわち、『犬はりこ』『このごろ草』『小さかつき』『かなめ石』『尤草子』『当世尤草子』『むさしあふみ』『花の名残』さらに北条団水の『武道一

覧』西鶴の『武道伝来記』『武家義理物語』『本朝二十不孝』が続き、分類の終わり近い位置に置かれている。一方『おとぎぼうこ』はそれより一丁前に『御伽物語』と『新おとぎ』にはさまれて置かれている。また、『伊曾保物語』の前後に置かれた書物も、すぐ前に置かれた『似我蜂物語』『そろり物語』とすぐ後に置かれた『宗祇諸国物語』以外は7と10ともこれまでの目録とも違った書物が並ぶ。

共通するのは書名に「物語」がつく点である。7、8、10の目録の版元に並ぶ人物は二人が共通しているのだが、8は編集が全く違ったのだろう。しかし、その中でも、『似我蜂物語』『そろり物語』『宗祇諸国物語』は必ず『伊曾保物語』と並べられていることは注目すべきであろう。

このように書籍目録によって『伊曾保物語』の位置づけを見てくると、『伊曾保物語』は「和書・仮名類」から「咄の本」、さらに「物語類」へと分類項目の中で移動させられていることが分かった。『伊曾保物語』はさまざまな要素を持っているためにいろいろな分類に入れられてきたのであろう。少なくとも、『伊曾保物語』は、初め教訓書と見なされていたが寛文十年の書籍目録以降は教訓書とは見なされなくなっているということだけは言える。次に、推測の域を出ないが、列記されている書物を見る限りにおいては、雑多な書物を含む「咄の本」に分類されるように

なっただけからは、寓話の笑話的要素から笑話集とも見なされるようになり、また一方、イソポの伝記部が注目されて、人物一代記とも見なされ、『一休はなし』や『西行歌咄』『宗祇諸国物語』とも列記されるようになったと思われる。さらには、「物語類」に分類される中で、新たに出てきた浮世草子とも列記されることになったのであろう。

三 『そろり物語』『似我蜂物語』と『伊曾保物語』

ところで、表を見ると、先にも取り上げた『そろり物語』と『似我蜂物語』は、Aの部類わけ目録では1の寛文無刊記書籍目録以外の全ての目録で、『伊曾保物語』と近い位置に置かれている。書籍目録において教訓書として分類されなくなった時から、『伊曾保物語』は、『そろり物語』『似我蜂物語』と同じ部類の書物と見なされてきたようである。それでは、この二書と『伊曾保物語』にどのような共通点があるのだろうか。

『そろり物語』は『近代日本文学大系』の中で「怪異小説」の中に収められているように、怪異談を集めたものである。その冒頭には、「曾呂利はなしはし書」として、次のように書かれている。⁽⁸⁾

人の心を慰むることわざ、限りなくさまぐなれども、貴賤貧富のさかひありて、心に任せぬもてあそび

事又多し。其の中に上がかみより下がしもまで隔てなきたのしみは、見るもの聞く事を口にまかせ語りなぐさむに如くはなし。爰に天正の頃ほひ、曾呂利といへる雑談の上手あり。大樹秀吉公に召されて、常にかれを愛したまふ。其の詞のたくみに花やかなる事は、齊の田辨が天口の辨、晋の裴頠が林藪の詞にも超えたり。まことにすさまじき事を論じては、目に見えぬ鬼神も速^す早^はこゝに出できたる心地にうしろこそばゆく、艶に哀れなる事を談ずれば、たけき武士もよわくと涙もろし。その弁舌博覧の名誉なる事は、壺中に天地をこめ、瓢箪より駒を出せし術にも過ぎたり。ある夜大樹のまへにておどろくしき事を語れとのたまふに、十づゝ十に及べり。近習の人々是を書きとめしに、年久しく反故にまじはり、多くは散りうせぬ。わづかに残りしをかいやり捨つるも惜しと、其の品にたぐへる物がたりの不思議なるを一つ二つ加へて、今また書き改むるもの歟。

ここには、天正の頃、曾呂利新左衛門というお伽衆がいて、豊臣秀吉に召し抱えられ大切にされていたこと、そしてその咄は非常に巧みであつたことが書かれている。ある夜秀吉公の前でおどろおどろしいことを語れと言われて曾呂利新左衛門の語つた咄が、十話で十巻に及んだ。太閤の

近くに仕える人々がこれを書き留めたが、長い年月のうちに反故に混じつて多くはなくなつてしまつた。僅かに残つたものを捨ててしまうのは惜しいので、これに類する不思議な物語も一つ二つ加えて今書き改めたという『そろり物語』成立の経緯が語られている。つまり、「はし書」に従えば、『そろり物語』は、咄が上手なことで太閤秀吉に大切に召し抱えられた曾呂利新左衛門が太閤に語つた咄を集めた物語なのである。

一方、『伊曾保物語』には「はし書」は付いていないが、その伝記部から、イソポという人物が自らの知恵と弁舌によつて運命を切り開き、奴隸の身分から自由になり更に諸国の王から信頼され、重用されていくことがわかる。また、そのイソポが書物を作つたこと⁹や、イソポがデルホスで殺害された後、イソポを重用したバイロウニヤ（バビロニヤ）とエジプト（エジプト）の王がデルホスを攻めた後イソポの物語が世に伝えられたのだ、ということがわかるのである。こうしてみると、咄の巧みなどところが太閤に愛され大切に召し抱えられた「曾呂利」と、自らの知恵と弁舌によつて諸国の王に信頼され重用された「イソポ」はよく似ている。そんな人物の作つた物語なのであるから、似た書物、同類の書物として、ずっと書籍目録に並べて置かれたのではないだろうか。

それでは、『似我蜂物語』はどうであろうか。『似我蜂物語』の序にはこのように書かれている。⁽¹⁾

……予が此年まで聞きし事共書留置ける書物に乞食袋と云もの有世の人の為自然は一行なり共ならんかしと思ひ品々の詞を綴あらはし侍る故に此草紙を似我蜂と名付る事此蜂何にても他の虫の子を取て我巢に入よき事を教養育してむつましく生育けると聞しより其心をかたとり似我蜂と号す……

これによると、『似我蜂物語』は作者が年頃書きためてきた『乞食袋(こつじきぶくろ)』という書物を世の人のためになることもあろうかと、刊行したものである。そして、「似我蜂」がよその虫の子を取って自分の巢に入れ、よいことを教え、養育して、親しく育てるというその心を模って『似我蜂物語』と名付けたということである。よその子を引き取り、よいことを教え親しく育てるという話は、『伊曾保物語』の伝記部で、自分に子供のなかったイソボが養子を取り、その養子に陥れられて危うく命を失う所であったのに、それを許し、彼のために十八条からなる訓戒を与える話を思い起こさせる。『伊曾保物語』の場合、養子に与えた訓戒の内容は、後の寓話における寓意の教えと共通するものが多くある。つまり、『伊曾保物語』の寓話はイソボが養子に教えようとしたことを寓話の形であらわ

したものとみえる。『似我蜂物語』の場合は、「似我蜂」がよその子を引き取りよいことを教え、親しく育てることに倣い、世の人の為になるかと思つて作者が書きためてきた書物を刊行したものであるから、この書物のねらいは『伊曾保物語』の場合とよく似ているのである。『似我蜂物語』の内容は随筆、説話、日用メモ等から小説に至るまで、雑多なものが混在している。このような雑多な内容の書物を分類し、書籍目録のなかに位置づけるのは難しいことと思われる。制作目的が似ているという意味で、同類の書物として、『似我蜂物語』はずっと『伊曾保物語』に並べて置かれたのではないだろうか。書籍目録における『伊曾保物語』の位置づけは、『伊曾保物語』の伝記部の話の展開もよく理解された上でなされていたといえるだろう。

四 おわりに

『江戸時代書林出版書籍目録集成』には明和九(一七七二)年刊の書籍目録までが掲載されているが、正徳五(一七一五)年刊書籍目録大全を最後にして『伊曾保物語』の書名はその後出てこない。また、『享保以後板元別書籍目録』⁽²⁾にも『伊曾保物語』の書名は出てこない。このことは、享保(一七一六年)以後は『伊曾保物語』が新たに出版

されることがなかったことを示している。

『日本書目大成』¹³掲載の「御国禁耶蘇書目」¹⁴には「伊吹モクサ」¹⁵、『三國通覧』、『海国兵談』と並んで『イソホ物語』が記載されている。『三國通覧』は林子平著、天明五（一七八五）年刊の地誌、『三國通覧図説』のことで、『海国兵談』は、これも林子平著、寛政三（一七九一）年刊の兵学書で、両書とも寛政四（一七九二）年に禁書絶版にされている。このことから、「御国禁耶蘇書目」も寛政四年以降のそれに近い時期に書かれたと思われるが、この目録に『イソホ物語』も記載され、当時は既に『伊曾保物語』が禁書とされていたことが分かる。江戸時代初期から中期にかけて盛んに出版され読まれた『伊曾保物語』は江戸時代中期になって禁書とされ、出版されなくなり、人々に読まれることもなくなったのである。¹⁶

さて、書籍目録における『伊曾保物語』の位置づけは、次のようにまとめられるだろう。『伊曾保物語』は、初めは「和書・仮名類」に分類され教訓書と見なされていたが、寛文十年の書籍目録以降は「咄の本」に分類されるようになり教訓書とは見なされなくなったのである。そして、推測の域を出ないが、「咄の本」に分類されるようになってからは、『伊曾保物語』伝記部の話の展開もよく理解された上で、イソポとよく似た弁舌巧みな人物の話として『そ

ろり物語』が、『伊曾保物語』と制作目的が似ている話として『似我蜂物語』が長期にわたって書籍目録中に列記されることになったのだろう。また、イソポの伝記部が注目されて人物一代記とも見なされ、『一休はなし』や『西行歌咄』、『宗祇諸国物語』とも列記されるようになり、また一方では、寓話の笑話的要素から笑話集とも見なされ、『醒睡笑』、『しかた咄』、『百物語』とも列記されるようになったと考えられる。そして、さらには、「物語類」に分類される中で、新たに出てきた浮世草子とも列記されるようになったのだろう。

キリシタンによってもたらされたイソップ寓話集が和訳された書物である『伊曾保物語』は、出版された当初は教訓書として受け容れられていた。これは『伊曾保物語』の寓話に必ず「その如く」で始まる寓意が付され、その寓意は処世訓・処世術を示した教訓であったからであろう。しかし、寛文十年以降は、『伊曾保物語』が教訓書として読まれることはなくなり、人物一代記や笑話集として受け容れられるようになる。人物一代記として読まれたのは、イソポの伝記部が、初め奴隸であったイソポが自由民となり、やがて王の重臣にまでなるといった一代出世話であるところからと考えられる。また、笑話集として読まれたのは、『伊曾保物語』の寓話が笑話であるからであろう。教訓書

から人物一代記や笑話集へと受け容れられ方が変化したということは、当初、寓話に寓意が添えられた教訓の書として『伊曾保物語』を形式的に理解していたのが、イソポの出世話や寓話そのものを、江戸時代の読者が楽しんで読むようになったということを示しているように思われる。

ところが、その後、『伊曾保物語』は禁書とされ、出版されることもなく人々に読まれることもなくなったのである。『伊曾保物語』が禁書とされ出版されなくなったのは、林子平の『三国通覧』『海国兵談』と同時であるから、寛政四（一七九二）年前後のことであつたろう。そうしてみると、初めに取り上げた、『伊曾保物語』を引用している書物の多くは『伊曾保物語』が禁書とされてから後に書かれたものである。樗牛道人の教訓書『鄙都言草』は享和二年（一八〇二）年刊であり、司馬江漢の『春波楼筆記』は文化八（一八一二）年刊、教訓書である『訓蒙画解集』『無言道人筆記』はどちらも文化十一（一八一四）年刊である。柴田享（陽方）の『続続鳩翁道話』は天保九（一八三八）年刊である。さらに為永春水による『絵入教訓近道』は天保十五（一八四四）年刊である。自著の中に禁書とされた書物を取り上げるのは、危険なことではなかったであろうか。『伊曾保物語』の寓話を書き留めていたこれらの書物は殆どが教訓書である。以下は想像にすぎないのだ

が、これらの著者たちは、『伊曾保物語』の面白さや教訓書としての価値をよく理解していて、禁書とされたことによつて多くの教訓話が失われてしまうことを惜しみ、自分の著述の中に残そうとしたのではないだろうか。

注

(1) 一度目録に掲載されながら次の目録からは外された書物には、寛文無刊記の書籍目録に掲載の『あさけり草』『野郎仙』『追かぜ』『若衆かかみ』『女秘伝』を例としてあげることができる。

(2) 武藤禎夫『万治絵入本伊曾保物語』（岩波文庫 二〇〇〇年）の解説には次のように書かれている。

国字本伊曾保物語は漢字仮名交じりの表記とともに、寓話の持つ教訓性が教外書と目されて、当時頻繁に出た『書籍目録』にしばしば書名が出て、一般の仮名字草書類同様に扱われている。仮名字草は、①教義や教訓などを説く啓蒙的なもの、②笑いの要素を含んだ娯楽的なもの、③日常生活に役立つ実的なもの、に大別されるが、書籍目録の項目で見ると伊曾保物語の位置が分かる。古く寛文無刊記目録には『和書并仮名類』中に『可笑記評判』『悔草』の次に載つて①に属すが、寛文十年分には『咄之本』の項で『醒睡笑』『一休はなし』などと同列であり、翌十一年分には『狂歌并咄之本』の項で『犬百人一首』『私可多咄』と同じく②に見え、延宝三年分には『仮名』の項で『異国物語』と『石山物語』の間に挟まれ、貞享二年分の『物語』の項では『似我蜂物語』の次に位置するなど、さ

さまざまな分類に入るが、一貫して目録に書名がある。この伊曾保物語は殆どが万治二年刊整版絵入本であろう。時には説話教訓物として、時には娯楽笑話物と目されながら、かなり広く読まれたと思われる、同時期や以降の仮名草子に間々伊曾保物語の話が見えるのも当然といえる。

(3) 井上書房 昭和三七(一九六二)年。

(4) その目次の項目には小文字で「五常書 孝行書 心李書 教訓書」と書かれている。

(5) これは、目録の目次では、「狂歌集并咄本」となっているのであるが、目録では書名の前に「咄の本」と分類項目が示されている。

(6) 3寛文十一年の書籍目録では、「狂歌并咄本」の分類の後半(咄の本)に分類される。

(7) 2、3、では「歌書并物語」の分類があり、4では「歌書付狂歌」の分類はあるが「物語類」の分類は無い。

(8) 本文は『近代日本文学大系』第十三巻(国民図書株式会社一九二七年)による。旧漢字は人名以外は新漢字に改めた。

(9) 『伊曾保物語』上巻第十二条。

(10) 『伊曾保物語』中巻第九条。

(11) 本文は『近世文学資料類従 仮名草子編』三八(勉誠社一九七九年)による。

(12) 清文堂 昭和五七(一九八二)年。

(13) 汲古書院 昭和五四(一九七九)年。

(14) 伝写本、伊藤氏有不爲齋旧蔵。

(15) 『伊吹モクサ』については不詳であるが、あるいは国学者狛諸也(二八〇二年没)の書いた随筆『伊夫岐具佐』の誤写であろうか。

(16)

『日本書目大成』には明和八(一七七二)年京師書林刊の「禁書目録」も掲載されており、その中にある、貞享乙丑(二)(一六八五)年南京船持渡唐本國禁耶蘇書(合計三十八部、一説では取捨して三十六部)と題した目録も「御国禁耶蘇書目」に引き写されている。その中には、「イソツプ寓話」の漢訳である「況儀」という書名も含まれている。しかし、禁書とされた「況儀」が原典は違え同じ「イソツプ寓話」の訳本であるということが、それまで盛んに出版されていた『伊曾保物語』が禁書となったことの理由とは断定できない。少なくとも、『伊曾保物語』は貞享二年以後三十年間は出版され続けていたのである。

「御国禁耶蘇書目」には先の貞享乙丑(二)年南京船持渡唐本國禁耶蘇書目録に続けてこのように書かれている。

右三十八部ノ外名目ニテモ出タル書ハ禁セサル其名目ハ
天主 耶蘇 西洋 歐羅巴 利瑪竇 利太西 利山人 陽
瑪若 湯若望 游藝 景教 彝學夷 西學

つまり、ここに挙げられた言葉の出でくる書物は禁書とされたわけである。『伊曾保物語』の冒頭、イソボの伝記部である第一巻の第一「本国の事」は「さる程に、エウロウバのうち、ヒジリヤの国トロヤといふ所に、……」と始まり、最初の部分に、禁書とされる言葉「歐羅巴」が出てくる。『伊曾保物語』が禁書とされた理由はこれではないかと思われる。